

6th International Tourism Studies Association Biennial Conference 参加報告

立教大学大学院現代心理学研究科 川久保 惇

<概要>

私は、2016年8月17日（水）から19日（金）まで、ロンドンのグリニッジ大学で開催された第6回 International Tourism Studies Association（以下ITSA）Biennial Conferenceに参加した。ITSAは、観光とホスピタリティに関する知識と研究の共有を目的として設立された学会である。2006年の第1回大会以降、隔年で開催されており、6回目に当たる今年は、初めてヨーロッパの地で開催された。

本年度は「Tourism cities and urban tourism」, 「The Chinese market for European tourism」, 「River, cruise and maritime tourism」, 「Heritage tourism in cities」の4つが学会のテーマとして掲げられて

いた。中国、ヨーロッパ、イラン、トルコや米国から様々な研究テーマを持つ研究者が集まり、5件の基調講演と89件の口頭発表が行われた。

開催地となったグリニッジは、ロンドンの中心部からおよそ10キロ南西に位置している。地下鉄やテムズ川の水上バスを使えば、ロンドンから30分ほどで行くことが可能である。グリニッジといえば、世界の時間の基準となるグリニッジ標準時を観測する天文台のある場所として知られているが、それ以外にも国立海事博物館や旧王立海軍学校などの見所がある。また、1997年には、「河港都市グリニッジ」として世界遺産にも登録された。会場となったグリニッジ大学から天文台までは徒歩で10分ほどの距離であった。



写真1 グリニッジ天文台

＜研究報告と所感＞

私の ITSA での発表タイトルは, " The effects of school excursions on subsequent travel experiences and generic skills" であった。発表は, 19 日の午後に行われた。決められたセッション内で 5 名の発表者がそれぞれ 20 分ほどの時間を使って, 口頭発表と質疑応答を行う形式であった。

発表内容は, 教育旅行の効果を心理学的な視点から検討したものであった。教育旅行とは, 学校行事の旅行である修学旅行および課外活動を指す。本研究課題では, 教育旅行が学生のスキル育成に及ぼす効果について検証した。中学生と大学生を調査対象者に設定した二つの研究から, 教育旅行のスキル向上に対する有意な影響が確認された。また, 教育旅行におけるどのような体験がそうした効果に寄与しているのか検討したところ, 新たな知識や情報の獲得などの自己成長を実感させる体験が最も効果的であることが示された。本研究課題によって得られた知見は, 教育旅行の目的地および内容の決定への応用が期待できると考えられる。ITSA での英語での口頭発表と質疑応答を通じて, 研究の問題点, 疑問点や今後の課題についての議論を深めることができた。

また, 今回私は二つの基調講演に参加した。一つ目は, Jonathan Wilson 教授によるインドネシアにおけるハラルツーリズムの紹介であった。ハラルとは, イスラム教の戒律の中で認められているもの全般を示す言葉である。例えば, イスラム教で禁じられている豚肉やお酒を利用していない料理や露出の少ない服装に身をまとう事をハラルと言う。そのため, ハラルツーリズムとは, ムスリムにとって「ハラル」とみなされるものを企画販売する旅行商品を指す。富裕層が拡大しているイスラム諸国では, 多くのムスリム達が海外旅行に行くようになった。そのため, ハラルツーリズムは非イスラム諸国で経済効果の非常に高いものとして注目を集めている。

二つ目は, Cara Aitchison 教授による大規模なイベント開催による都市経済への影響の紹介であった。サッカーのワールドカップやオリンピッ

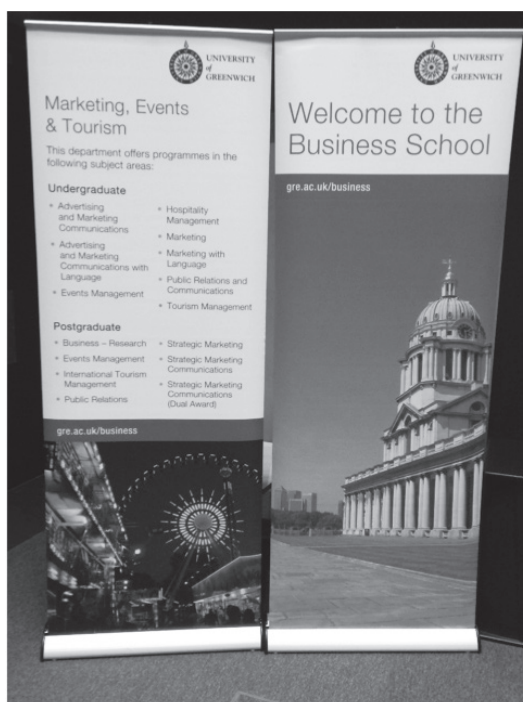


写真 2 学会案内のポスター

クなどの国を挙げての大きなイベントが, プラスの経済効果だけではなく, 経済格差や貧困層の拡大につながってきたことを指摘していた。2020 年には東京でオリンピック開催が予定されていることもあり, 興味深い講演であった。

学会最終日には, 学会主催の Post-conference tour としてテムズ川の水上市クルーズがあった。ウェストミンスター宮殿, セント・ポール大聖堂, タワー・ブリッジやロンドン塔といったロンドンの観光名所の多くは, テムズ川沿いにあるため, それらを船の上から見学することが出来た。今回の ITSA に限らず, 国際学会への参加は, 他国の研究者と交流する数少ない機会になるため, 今後も積極的に参加したいと考えている。

最後に学会参加費, 渡航費および現地滞在費への助成を頂いた立教大学現代心理学研究科の関係者各位, 研究に協力して頂いた調査協力者の方々と共同研究者の皆様に深く感謝申し上げたい。